

社長の本棚

点、中国や韓国などのアジアの拠点を訪れた国は100カ国を超えた。今年9月にはジェトロの「中欧サード産業支援ミッション」に参加予定だ。

収集にも抜かりはない。「経済新聞や経済雑誌を読んで、気になる記事を休日などに自宅でスクラップして、流通、サービス業に関する会社や施設、店舗の情報を事前に集めます。それでチェックしたところを見に行く。ですから、海外にはスクラップブックも持っています」

日本でのオフィスコーヒーサービスのパイオニアで、コーヒーサービスのウオーターサービスなどを日米で20万社以上に提供している、東証1部の上場企業だ。創業者の大久保真一社長は、1年のうち150〜200日は海外を飛び回っている。

向くほか、ジェトロさんが主催する海外現地視察に年3、4回参加しています。それらに欠かせないのが、ガイドブックの『地球の歩き方』。ビザの取り方から街の歩き方まで、ツアーなどでなく、一人歩きできる情報がしっかりと入っていて、ガイドブックではこれが一番いい。海外に行く際は、これと、グーグルマップを利用してためのスマホアプリ「地球の歩き方」をベイスに、さらなる情報

海外を飛び回る際の必需品

「地球の歩き方」をベイスに、さらなる情報

75歳 大久保真一さん
「ダイオーズ」代表取締役社長



最新版「地球の歩き方」が50冊以上スラリと並ぶ

「同じ都市や国のものでも、情報は古くなるので、3、4年に1回は買い替えています」

し、アメリカに1年、続いてヨーロッパに1年滞在し、現地の流通サービス業で働き学んだ。事業の手がかりを求めたためだった。

普段は「小説などはあまり読みません」と笑うが、「これだけは本棚にずっと取ってある」本が一冊だけある。小田実の「何でも見てやろう」だ。

「1930年代で、海外へ持ち出せるお金は500円が限度。いかにお金を使わずに目的を果たすかが大きな問題でしたが、小田さんの貧乏旅行記録、

「小田実さんの貧乏旅行記録」だけはずっととってあります

「何でも見てやろう」は、26歳のころ、妻と生まれ、たばかりの長男を日本に残

まさにそれが実体験をもとに書いてあった。この本を何度も読み、頭に叩き込んで、貨物船の船底でアメリカに渡りました。現地では内容を思い出し、行動の指

針の一つにしましたね」日本ではまだ日本茶やインスタントコーヒーの時代だったが、アメリカではオフィスコーヒーサービスが普及していて、それを自分の目で見たことが、ダイオーズの創業へとつながる。

「ですから、『何でも見てやろう』は、自分の原点であり、会社の原点でもあります。当時は単行本でしたが、今は、この文庫本を大切にしています」

「地球の歩き方」で世界を見て歩き、新しい情報を経営に取り入れてきたことが、同社の今日の発展の一助となっているのは間違いない。



これまで訪れた国は100カ国を超えた